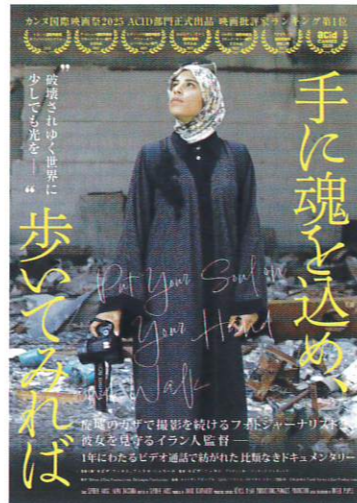


映画上映会『手に魂を込め、歩いてみれば』

壊されゆく世界に、それでも光を届けようとした24歳のフォトジャーナリスト、ファトマ・ハッサーナ。イスラエルによるガザ攻撃のただ中にある彼女と、それを見守るイラン人監督との1年にわたるビデオ通話で紡がれたドキュメンタリー映画です。上映会後にはパレスチナの現状などについて、日本国際ボランティアセンター(JVC)の高橋千絢さん(パレスチナ担当)にお話しいただきます。

日時 4月11日(土) 開場13:00 開演13:30
 会場 スペース・オルタ(オルタナティブ生活館地下1F) お申込みはこちらから
 料金 大人1,000円、中高生500円
 定員 100名
 お申込み 二次元コード読み取り、もしくは下記のアドレスよりご入力ください
<https://forms.gle/ijUcehiRuNBBp6ms8>
 主催 特定非営利活動法人 地球の木
 協賛 オルタナティブ生活館、スペース・オルタ
 お問い合わせ 地球の木事務局 office@ngo-earthtree.org ☎045-228-1575



No.101
2026.3.10

地球の木

地球上のすべての人たちと共に生きたい

CONTENTS

- パレスチナ・ガザの今を知る 1
- 出前講座のワークショップを体験 2
- 多文化共生の地域づくり 2
- あーすフェスタかながわ 3
- SAGUNの取り組み「アーユルヴェーダ」 3
- 映画上映会『手に魂を込め、歩いてみれば』 4
- インフォメーション/活動日誌 4

パレスチナ・ガザの今を知る

日本国際ボランティアセンター(JVC) 高橋千絢

パレスチナ・ガザでは2023年10月7日以降、陸・海・空からの激しい攻撃が続き、2025年10月に「停戦」を迎えた今も状況は大きく改善していません。これまでに7万人以上が命を落とし、負傷者は17万人を超えています。この一人ひとりに生活があり、家族があり、守りたい人がいました。さらに2025年3月からは食料、水、医薬品などの支援物資の搬入を止められ、生きるために必要なすべてのものが不足しています。分離壁と海に囲まれ、移動の自由を奪われたガザで、支援物資が届かないことの意味は深刻です。食べるものがなく、やせ細っていく子どもたち。人為的な飢餓による栄養不良は、数十年にわたって深刻な影響を及ぼします。

物資不足は今も続き、冷たい雨が降り続けるガザの冬を乗り越えるためのテントや毛布が足りず、寒さで命を落とす子どももいます。JVCのガザスタッフは、今のガザを「ゴーストタウンのようだ」と言います。「絶望と悲慘に満ち、生活に必要な基本的なものを探し求めても見つからない。さらに、日々危険を感じるため、心理的な不安や未来への恐怖を抱えながら生きている」—それが今のガザなのです。

JVCは、25年以上にわたりガザで支援活動を続けてきました。かつては駐在員もガザに入り、現地パートナー団体と活動のモニタリングを行っていました。数年おきに繰り返される攻撃、汚水や停電、移動の制限といった厳しい環境の中でも、人々は明るい笑顔で迎えてくれ、そのあたたかさや強さが印象的でした。

現在、JVCと現地パートナー団体は、従来の栄養失調改善事業を緊急支援に切り替え、3歳以下の子どもと保護者を対象とした栄養支援の活動を行っています。これまでに5,000人以上の子どもたちに簡易栄養スクリーニングを実施し、必要な栄養補助食品等を配布、2,000人以上の妊婦や保護者に個別カウンセリングや講習を実施しました。また、東エルサレムで長年協働した別の現地パートナー団体と医療支援を行い、粉ミルク7,500缶、医薬品9,500錠を配布しました。さらに2025年11月からは診療所の運営支援も開始し、地域医療を支えています。

今もガザにはたくさんの方が生きています。現地パートナー



子どもの栄養支援として、栄養補助食品を配布する現地パートナー団体スタッフ(ガザ中部、2025年)

団体のスタッフやボランティアたちの、あの明るい笑顔や強さは、今も変わりません。しかし、その笑顔や強さの裏には想像を絶する苦しみや悲しみがあります。自分自身も避難生活をし、大切な人を失った悲しみを抱きながら、それでも一人でも多くの命を守りたい、そんな思いで活動を続けています。

JVCのガザスタッフは言います。「どうかガザの人々を忘れてください。世界中からの支援は、どんなに小さくても、確実にガザに届きます。日本からの支援は、お年寄り、子どもを持つ母親、子どもたち—それぞれに名前と夢と人生のある誰かに、確かに届くのです。」

～映画『手に魂を込め、歩いてみれば』上映会のお知らせ～

地球の木では、4月11日(土)、ガザのドキュメンタリー映画の上映会を開催します。詳しくは本誌4ページ、地球の木ホームページをご覧ください。

第27回 地球の木総会のお知らせ

日時 5月30日(土)
 13:30～15:00 第27回通常総会
 15:30～17:00 ラオス支援地訪問報告会
 会場 オルタナティブ生活館3階301会議室
 住所 横浜市港北区新横浜2-8-4(新横浜駅より徒歩7分)

詳細は別紙の「第27回地球の木総会のお知らせ」もしくは団体ホームページをご覧ください。

＜ラオス支援地訪問報告会＞ 村人の声を聞く！

地球の木は、JVCを通し、ラオス農村部の村人の自立支援活動を行っています。2022年からはラオス南東、ベトナムと国境をなすセコン県が活動地。2026年3月、その支援村を訪れました。村人たちの生の声をお届けします。

2025年末募金と領収書発送の報告

「ご協力いただきありがとうございました！」

今年も会員の皆さまをはじめ、**87名**の方からご協力をいただきました。皆さまのあたたかいお気持ちに心より御礼申し上げます。

年末募金総額 **700,400円**
 〈寄付先別内訳〉

- ◆ネパール..... 115,500円
- ◆ラオス..... 107,500円
- ◆指定なし..... 477,400円

©2025年にいただいたご寄付の領収書を2026年1月27日に発送いたしました。

活動日誌(11月～2月抜粋)

- 11月
 - 1日 第2回出前講座共有会
 - 15日 生活クラブ生協 なか commons 体験フェスタ(クラフト販売)
 - 16日 第3回運営連絡会
 - 22日 東日本復興まつり
 - 25日 会報第100号発行
 - 29・30日 あーすフェスタかながわ2025
- 12月
 - 5・6日 オルタ館フェスタ(ワークショップ・クラフト販売)
 - 10日 ネパールスタディツアー説明会
 - 20日 第4回定例理事会

- 1月
 - 15日 ネパールスタディツアー説明会
 - 18日 第4回運営連絡会
 - 30日 第2回臨時理事会
- 2月
 - 7日 ウィンターフェス@相模原センター(クラフト販売)
 - 14日 SGD's CITYフォーラム2026@JICA横浜(ネパール講座・ラオスのクラフト販売)
 - 15日 第5回定例理事会
 - 16～26日 南北コリアとかながわのともだち展 講演会 東北アジアの平和と「ともだち展」の歩み(21日)
 - 18日 ネパールスタディツアー事前学習会

出前講座のワークショップを体験

地球の木の活動を知ってもらふ大切なツールである「出前講座」は、世界の構造と私たちの暮らしとの関係について学び、世界の多様性を知る貴重な場でもあります。地球の木は、これまで中学や高校の国際教育の現場や地域の学習会などに出向き様々な出前講座を行ってきました。支援地の様子を知り、現地で起こっていることやそこで暮らす人たちに思いを馳せ、一緒に考える体験は、特に子どもたちにとって意義深いものになっているはずです。

しかしながら近年は、講師役を担うファシリテーター不足が目立ってきています。なんとかしなければと、まずは地球の木の理事たちを中心に、出前講座を体験する会を以下のように開きました。



「ネパール・タルー族の家族ゲーム」を体験

出前講座を体験してみた感想は、「字が読めない体験は日本に住む外国籍の人たちにも通じる。多文化共生関連の活動の場でも活かそう」「中高生だけでなく、大人も世界のことを学びたい人は多いのでは」「身近に暮らすネパールやラオスの人たちを知るきっかけになるといい」など。

地球の木の支援の現場から生まれた出前講座を皆様の地域でも開いてみませんか？ (会報作成チーム 斎藤和子)

2025年度に実施した出前講座

- 6/14 鎌倉女学院高校で1年生を対象にワークショップ「ネパール・タルー族の家族ゲーム」を行った。
- 7/5 町田市立真光寺中学校1年生のクラスで「ラオスってどんな国？」を行った。
絵本「森の歌がきこえる」の読み聞かせとそれを題材にしたワークショップも行った。

10/5 「ネパール・タルー族の家族ゲーム」

地球の木が支援した識字教育を元にしたワークショップで、字の読めない体験をしてみる。紙芝居「デブラ二物語」を観る。

「ネパールわくわくワークショップ」

布や器など、ネパールの生活用品を手に取り触ったりにおいをかいだりしてネパールの暮らしを想像し、文化の多様性を知る。

11/1 「ラオスってどんな国？」

森や川と共に生きるラオスの村人たちの生活を知り、森が失われる「経済開発」や「豊かさ」について考える。

「マジカルバナナV3」

買う、食べるという私たちの消費行動が世界のどこなところとどんな影響を与えるのか。バナナを通して世界を知り、社会のあり方を考える。

多文化共生の地域づくり

地球の木と多文化共生

今県内においても、在日コリアンを始めとする外国籍の人々に向けられているヘイトスピーチなどによる差別の問題は、「多文化共生」の意味を根本から問う重要な課題だ。地球の木はこれらの問題を一緒に考える人を増やし、共に外国籍の人々との信頼関係を広げていきたいと願っている。その一歩として、地球の木と韓国・北朝鮮との今までのつながりなどについて、顧問の丸谷士都子さんから話を聞いた。

食糧支援から始まる

1995年、朝鮮民主主義人民共和国(DPRK)の大雨洪水被害に対し、日本国内でも様々な支援活動が始まる。国際協力NGOも活動を始め、地球の木もキャンペーンに参加した。

1997年には、地球の木を含む5団体で「北朝鮮子ども救援キャンペーン」(のちの「KOREA子どもキャンペーン」)を立ち上げ、食料や医薬品などの支援を行なった。その後、拉致問題などで人道支援が難しくなり、地球の木は、日本、韓国、北朝鮮などの子どもたちの絵とメッセージを交換する「南北コリア

と日本のともだち展」への参加が主な活動となった。

韓国の女性グループとの交流

2005~2009年には、韓国の女性たちのグループと日韓地球市民教育交流を行った。ワークショップが横浜とソウルで2回ずつ実施され活発な交流が行われた。

「国際外交」そして「あーすフェスタ」へ

1975~1995年に神奈川県知事を務めた長洲一二氏は、「国際外交」を唱えた。「神奈川そのものを国際社会にするためには、その一員として外国籍県民も権利が守られ、生き生きと活躍できなくてはならない」と述べている。

この「国際外交」の流れを受け継ぎ、2000年に外国籍県民かながわ会議や「あーすフェスタかながわ」が始まった。当初から地球の木は「あーすフェスタかながわ」の実行委員会に入り、外国籍の人たちと一緒に活動を続けている。

(会報作成チーム 沼田由美子)

「あーすフェスタかながわ」

11/29(土)・30(日)に、JR「本郷台」駅近くの県立「あーすプラザ」で、多文化共生をテーマとする「あーすフェスタかながわ2025」が開催されました。

神奈川県国際課が事務局を担っているこのお祭りは、2000年の第1回開催から続く歴史あるイベントですが、その実行委員会に、地球の木もずっと参加しています。私は、このお祭りに、地球の木から選出された企画委員として4年前から関わるようになりました。2025年の夏、参議院選挙の際に「日本人ファースト」という言葉が吹き荒れたので、国内に広がる排外主義を乗り越えるために、この「あーすフェスタ」が役立ってほしいと思いながら、様々なメンバーと話し合っって企画を準備しました。あーすフェスタは、主に「ステージ」「フォーラム」「ワークショップ」の3つでできていますが、私はずっと「ワークショップ」に関わっています。2025年は、「多文化カフェ(世界のお茶を楽しもう!)」、「世界の絵本読み聞かせ」、「ハワイ語とフラ(ダンス)」、「世界の楽器」「世界のおもちゃ・ゲーム」「インドネシアの影絵ワヤン」などなど、大人も子どもも楽しめる企画満載でした。地球の木のネパールチームも「ネパール文化と言葉について学ぼう」というコーナーで活躍しました。夜の会議開催や、民族衣装の実物チェックなど、企画の準備は時間がかかりますが、様々な外国籍の人々と友だちになることができます。企画委員はだれでも参加できます。一緒に関わってみませんか？ (多文化共生の地域づくりチーム 山田孝志)



ワークショップ部会長のオザナさんと山田さん

子どもたちのフェイスペインティング

地球の木のネパールコーナー

from Nepal

SAGUNの取り組み「アーユルヴェーダ」

今回は、ネパールで地球の木と共に活動している現地NGOのSAGUNが、インドラサロワール農村自治体で教育プログラムと共に力を入れているもう一つの活動についてご紹介します。

皆さんは「アーユルヴェーダ」を聞いたことはありますか？ アーユルヴェーダとは5000年以上の歴史を持つインド発祥の伝統医療です。サンスクリット語で「アーユス(生命)のヴェーダ(科学、真理)」という意味であり、「生命の科学」とは言い換えれば「生きるための知恵」とも言えるでしょう。現代医学が対症療法に重点を置くのに対し、アーユルヴェーダは個人の体質や状態に合わせて、薬草、マッサージ、食事療法、ヨガ、瞑想などを組み合わせます。症状の緩和だけでなく、身体の自然治癒力を高め、長期的な健康を維持することを目指します。



カニカ農業高校のハーブガーデン

住民参加を基盤とし、コミュニティと共に学ぶことを優先しているSAGUNでは、地元住民が代々慣れ親しんできたアーユルヴェーダを用いた健康づくりに力を入れています。

- ①ライフスタイル改善を目的としたアーユルヴェーダ健康教育の普及(食事の改善、ヨガ教育、ハーブの使用による健康増進など)
- ②家庭用ハーブガーデンの設置(SAGUNの地域事務所や市役所の周囲にもハーブガーデンが作られています)
- ③学校用ハーブガーデンの設置による生徒、教師、保護者への啓発(地球の木が支援しているカニカ農業高校の傍らに設置されたハーブガーデンでは、訪問した私たちに高校の先生が各ハーブの薬効を詳しく説明してくれました)
- ④薬用植物の配布
- ⑤アーユルヴェーダと自然療法に関する研修の開催
- ⑥アーユルヴェーダに関する小冊子の発行

ここには、欧米の開発にならって経済一辺倒の開発を進めるのではなく、地域の人々と共に地域にあるものを活かして進めるSAGUN流の開発のあり方がよく表れています。人と自然と文化の調和を重んじるSAGUNの姿勢は、持続可能な社会が目指すイメージと共通するのではないのでしょうか。

(ネパールチーム 磯野昌子)